



2024 年

8 月 第 1・2 週 の 主 日 礼 拝 説 教 要 約

・ 8 月 4 日 : ルカ福音書 11 : 9 - 13 .

『 慈父の恩寵 』

・ 8 月 11 日 : ヨハネ福音書 6 : 48 - 58 .

『 言が人に、命のパンに 』

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

《 慈父の恩寵 》

あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている。まして天の父は、求める者には聖霊を与えてくださる。（ルカ福音書 11：13）

イエスは一体誰に向かってこの話をしているのでしょうか。どこかの“悪い者”たちに向かって何かを咎めている時の、“諭し”なのでしょうか。聖書を読む限り相手はイエスの弟子たちのようです。彼らの中に“悪い者”が存在したのだとすると、イエスはイスカリオテのユダのことを想定しているのでしょうか。しかし、イエスはむしろ、ここでは分け隔てなく「あなたがたは」と言っているのです。

では、彼らのうちの誰が（悪い）父親だったのか。読者が知る限り既婚者は弟子のリーダーのペトロだけで、彼の家族の名前も、また子供の有無も一切、不明です。イエスがヨハネ福音書の6章で、ご自身のことを「命のパンである」と言い、これを食する者は、「永遠の命を得…、終わりの日に復活させる」と話した時に、12弟子以外の「弟子たちの多くが離れ去り、もはやイエスと共に歩まなくなった」ことが分かっています。離散した彼ら（多くの弟子たち）がまだ弟子集団を形成していた段階で、その中にもしかしたら“悪い者”の該当者が複数いたのでしょうか。真意は謎です。さて、その前にイエスはこう話されました。

求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。叩きなさい。そうすれば、開かれる。誰でも求める者は受け、探すものは見つけ、叩く者には開かれる。

（ルカ福音書 11：9 - 10）

ここでは、特定の該当者にではなく、誰でもその気になれば事は起こり、事は運ぶことを約束します。奮起することの大切さが語られているようです。造り主なる神により、そうなるといった対応原理が設定されたのでしょうか。

この一見、人と人との関係に見えるものが、神と人においても妥当するというのがどうもこの譬えの言わんとするところのようです。そういえば神と人は聖書では度々、“親子”の關係に譬えられます。この場合の神は父親です。会衆の祈りでも「父なる神」と唱えられます。「天にまします我らの“父”（＝神・造り主）よ」と。「日ごとの糧を与えたまえ」と、キリスト教徒はこの神に向かって日々、祈ります（主の祈り）。

本日、プログラムの下に引用したアモス書の5章の4節の後半にこう記されています。

私（神）を求めよ、そして生きよ。

個別に何かを神に祈ることも大切なのですが、神ご自身は、それよりも何よりも、もっと大胆に人間がご自身を“祈り求める”ことを奨励しています。これが、イエスが言った、「求める者には聖霊を与えてくださる」という結果と、けっして無関係ではなさそうです。

《 言が人に、命のパンに 》

すべての命は私のものである。父の命も子の命も私のものだ。罪を犯した者は、その者が死ぬ。（エゼキエル書18：4）

命の源でありまた造り主でもある神は、命の管理者でもあられます。野の花も、空の鳥も、人間も、これらの命は神のものです。ただ、この世の命は食物連鎖によって成り立っているのは明白です。人となったイエスは魚やパンを食されたし、水や葡萄酒を飲まれたことは疑う余地はありません。この、誰もが生きるためにしていること、これによって成り立つ命のことをイエスは“尽きる命”と言いました。一方、イエスが語っている真の命とは、“尽きない命”のことのようです。

私は命のパンである…これは、天から降ってきたパンであり、これを食べる者は死なない…このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。（ヨハネ福音書6：48-51）

このヨハネ福音書の始まりにはこう記されています。

初めに言（ことば）があった。…言（ことば）は肉となって、私たちの間に宿った。私たちはその栄光を見た。それは父（なる神の）独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。

（ヨハネ福音書 1：1…14）

肉（人体）をとった言（ことば）こそ、父（なる神）の独り子であるイエス・キリストであり、食すべき天からの命のパンとは、ご自身の血肉のことであるとこれを言い直した時に、12弟子以外の弟子集団の「多くが離れ去り、もはやイエスと共に歩まなくなった（ヨハネ福音書 6：66）」ことが報告されています。

ある日、別の場面で12弟子がパンの過不足のことを船上で議論をしていた時に彼らに向かってイエスはこう言いました。

目があっても見えないのか。耳があっても聞こえないのか。

（マルコ福音書 8：18）

イエスは、あの手この手を用いて大切なことを弟子たちに悟らせようとしますが、埒が明かないことが多々ありました。一番身近にいた弟子たちでさえも何かを悟ることが困難なときに、もはや人間の目や耳にうったえるのではなく“口で食べさせる”という選択肢がのこされていたのだとすると、イエスは敢えて、これを試みられるのでしょうか。「私（神）を求めよ、そして生きよ（アモス書 5：4）」という先週の神の言葉を思い出します。

少なくとも、イエスの「私の肉」は十字架上の出来事を通して、人間に贈与されます。神は“成し遂げられた（ヨハネ福音書 19：30）”独り子の肉を、人間に差し出したのです。これを目で見て、手に取って食するかどうかは、いざ知らず。その時、頭が混乱したままで、悟ることの遅いイエスの弟子たちは、その“体”に近づくことも、これを引き取ることも出来ませんでした。命のパンの最後やいかに…。